

本編⑨「儀法 vatta 犍度（小品第八：行儀作法）」2020.8.1

比丘（同士）の行儀作法についての「犍度（体系的にまとめたもの）」  
の つづき

前回の質問への答えに追加：

経典・教えは、理屈や因縁で教えて理解・納得に導く。

戒律は、比丘の問題行動や在家者・比丘同士の不満を由縁に、ただ定める。

禁止戒律は「ダメ」と。勧める戒律は「～することを許す」と。

※戒律を定める由縁は記録されているが、なぜそれが「ダメ」なのかなぜ「すべき」なのか、その理屈や理論は語らない。なぜ？

◎藤本が考える理由：

- ・ 経典・教えは、理解・納得するだけでも価値がある。心が成長する。
- ・ 戒律は、理屈を学ぶだけでは意味がない。実行して（サティで行動して）初めて心の成長になる。だからとにかくやれ。

→しかし、「ダメ」「すべき」だけでは命令⇔服従の関係にならないか？

- ・ 強制ではない。師弟関係（教える者と教わる者）の最低限の約束。  
「この教えの弟子として頑張りたいならこのルールを守ってください。こうやってください」。

「はい、わかりました」。○

「いいえ、私はこれはこのようにやった方がいいと思います」。×

→「では、あなたのやりたいようにやっていいです。さようなら」。

- ・ **戒律は素直さを測るバロメーター。**

問題があったから決めたルール。それを守ると約束するのが師弟関係。

実行すればサティになり心の成長になる。

約束したのに戒律を守らなかった。→罰則で許される。

戒律の制定されていない部分を見つけてそれをやる、などという六群比丘のような性格では、サティの実践以前に、心が悟りに向かっていない。向かう素質がない。しかし、これでもまだ弟子。

※「いいえ、私はこうやりたいです」では、弟子が自分で考え行動するので、さらに、弟子が師匠に教えてあげることになるので、弟子入りする必要がない。師弟関係が成り立たない。

◎ゆえに、戒律という教えは「ただ、守りなさい」だけ。

現代でもスマナサーラ先生の勉強会では、懇切丁寧に論理的に、ただ教える。

しかし、瞑想会では、

「ここでは、これまでの自分のやり方は措いておいて、私に言われたとおりにやってください」と、理屈や理由の説明なしに、ただ、やるように勧める。

またの説明は：

瞑想会で指導に従って理屈をこねずただ素直にまねして実践するのが、戒。実践して修行が進むのが、定。

悟りの智慧が現れるのが、慧。 → 戒定慧の三学。

これを八聖道の順番に充てると（理解から実践へ）：

正見・正思惟 → 慧

正語・正業・正命 → 戒

正精進・正念・正定 → 定

※まず、経典（説法）を聞いて理解（正見・正思惟→慧）する。

ここまでは一般の人にも開放されている。理解するもしないも各人の自由。

※「この教えに入って自分も悟りたい」と一念発起して出家。

師匠のお世話をしながらサンガで生活（正語・正業・正命→戒）。

このときに、「こんな生活は嫌です。こういうふうにしてはどうでしょうか」

などと弟子が師匠に進言すると共同生活がメチャクチャ。

理解（慧）した教えを体得するための戒定慧の歩みの戒でつまずくと、、、

※正精進・正念・正定に達しないのではないか。

## ⑤托鉢の儀法

そのとき、托鉢に行く piṇḍacārikā 比丘たちは上衣下衣を整えず、威儀が揃 *ākappa-sampanna* わないまま托鉢し piṇḍāya caranti、観察せずに *asallakkhetvā* (*saṃ-lakkhati*) 民家に入り、観察せずに出て、あまりに急に *atisahasā* [民家に] 入り、あまりに急に出て、甚だしく遠くに立ち、甚だしく近くに立ち、とても長い時間立ち、とても短時間で去ったりした。

托鉢していたある比丘は、観察せずに民家に入り、門だと思って寝室 *ovaraka* (母胎) に入った。その寝室には婦人が裸で仰向けに寝ていた *naggā uttānā nipannā hoti*。その比丘はその婦人が裸で仰向けに寝ているのを見て、「これは門ではなく寝室だ」と思って寝室から出た。その婦人の夫は [その比丘が寝室から出るのを見て] その婦人が裸で仰向けに寝ているのを見て、「この比丘に私の妻が汚された」と思い、その比丘を捕まえて [棒で] 打った。その婦人はその音で目覚め、その男に言った。「旦那様、あなたはどのようにしてこの比丘を打つのですか?」「この比丘はそなたを汚したのだ」「旦那様、この比丘は私を汚していません。この比丘は無実 *akāraka* です」と言ってこの比丘を解放させた。

その比丘は僧園に戻って比丘たちにこの事を告げた。少欲の比丘たちはイラ

イラ、怒る、悩む。「どうして托鉢する比丘たちは、上衣下衣を整えず、威儀が揃わないまま托鉢し、観察せずに民家に入り、観察せずに出て、あまりに急に〔民家に〕入り、あまりに急に出て、甚だしく遠くに立ち、甚だしく近くに立ち、とても長い時間立ち、とても短時間で去ったりするのか」。⇒釈尊に報告。「真実か?」「真実です」。叱責して *vigarahitvā*、説法して（説法はいつも）、  
「では、比丘たちの托鉢の儀法を制定します」。

○

比丘たちよ、托鉢に行く比丘は「今、村に入る」と〔観察して〕、三輪 *timaṇḍala*（へそと両ひざ）を覆い、下衣を巻き付け、帯 *kāyabandhana* を締め、大衣を畳んで紐で縛って、鉢を洗って携え、よく慌てずに村 *gāma* に入るべし。

（食堂に行くときと異なり、「横を歩いて長老比丘たちの前に入るべからず」はなし。「托鉢は一行に並んで」は最初からできていた?）

よく身を覆って屋内 *antaraghara* を行くべし。よく身を制御して *saṃvuta* 屋内に行くべし。眼を下に向けて *okkhittacakkhunā* 屋内に行くべし。（衣?眼?を）上げずに *na ukkhittakāya* 屋内に行くべし。

笑いながら屋内に行くべからず。大声で……身体を揺らして……肘を揺らして……頭を揺らして……腰に手を当てて *khambhakatena*……頭を覆って……屈んで *ukkuṭīkāya* 屋内に行くべからず。

民家に入るときは観察すべし、「ここから入り、ここから出る」と。あまりに急に *atisahasā*〔民家に〕入るべからず。あまりに急に出るべからず。甚だしく遠くに立つべからず。甚だしく近くに立つべからず。とても長い時間立つべからず。とても短時間で去るべからず。

立って、〔その家の人〕が托鉢食を与えようとしているか与えようとしていないかを観察すべし。もし〔その家の人〕が用事を措き *kammam nikkhipati*、座より立ち、匙を拭き *kaṭacchum parāmasati*、器を *bhājanam* 拭き、あるいは置いた *ṭhabeti* ら、与えようとしているようだと思つて立ち留まるべし。

食を受けるときは、左手で *vāmena hatthena* 大衣を持ち上げ *saṅghāṭim uccāretvā*、右 *dakkhiṇena* 手で鉢を差し出し *paṇāmetvā*、両手に鉢を持って食を受けるべし。施食者の顔を見るべからず。

副菜 *sūpa* を与えようとしているか与えようとしていないかを観察すべし。もし匙を拭き *kaṭacchum parāmasati*、器を *bhājanam* 拭き、あるいは置いた *ṭhabeti* ら、与えようとしているようだと思つて立ち留まるべし。

食を受けたら、大衣で鉢を覆い、慌てず立ち去るべし。

よく身を覆って屋内に行くべし。よく身を制御して屋内に行くべし。眼を下に向けて屋内に行くべし。（衣?眼?を）上げずに屋内に行くべし。

笑いながら屋内に行くべからず。大声で……身体を揺らして……肘を揺らして……頭を揺らして……腰に手を当てて……頭を覆って……屈んで屋内に行くべからず。

村での托鉢から先に帰る者は、床・坐を設け、洗足水、足台、足布を整え、残食(食べ残しではなく食べる前の取り置き)を入れる器 *avakkāra-pātī* を洗って整え、飲用水、用水を整えるべし。

村での托鉢から後に帰る者は、もし残食 *bhuttāvasesa* があって欲せば食し、欲せずば青草のない地 *appaharita* に捨てるべし。もしくは虫などがいない水 *appāṇaka-udaka* に沈めるべし。床・坐を片付け、洗足水、足台、足布を片付け、残食を入れる器を洗って納め、飲用水、用水を納め、食堂 *bhattagga* (托鉢して得た食物を比丘同士で配食して食べるための食堂は釈尊当時からあったと分かる。残食は昼までに全部捨てられる) を清めるべし。

飲み水瓶あるいは用水瓶、大便所の水瓶が空っぽ *rittam tuccam* なのを見たら、その人が補充すべし。もし彼が出来なければ *avisayha*、手の動きで *hatthavikārena* もう一人を呼んで手振りで *hatthavilaṅghakena* 補充させるべし。このために言葉が発せられてはならない。

以上が托鉢比丘の儀法です。